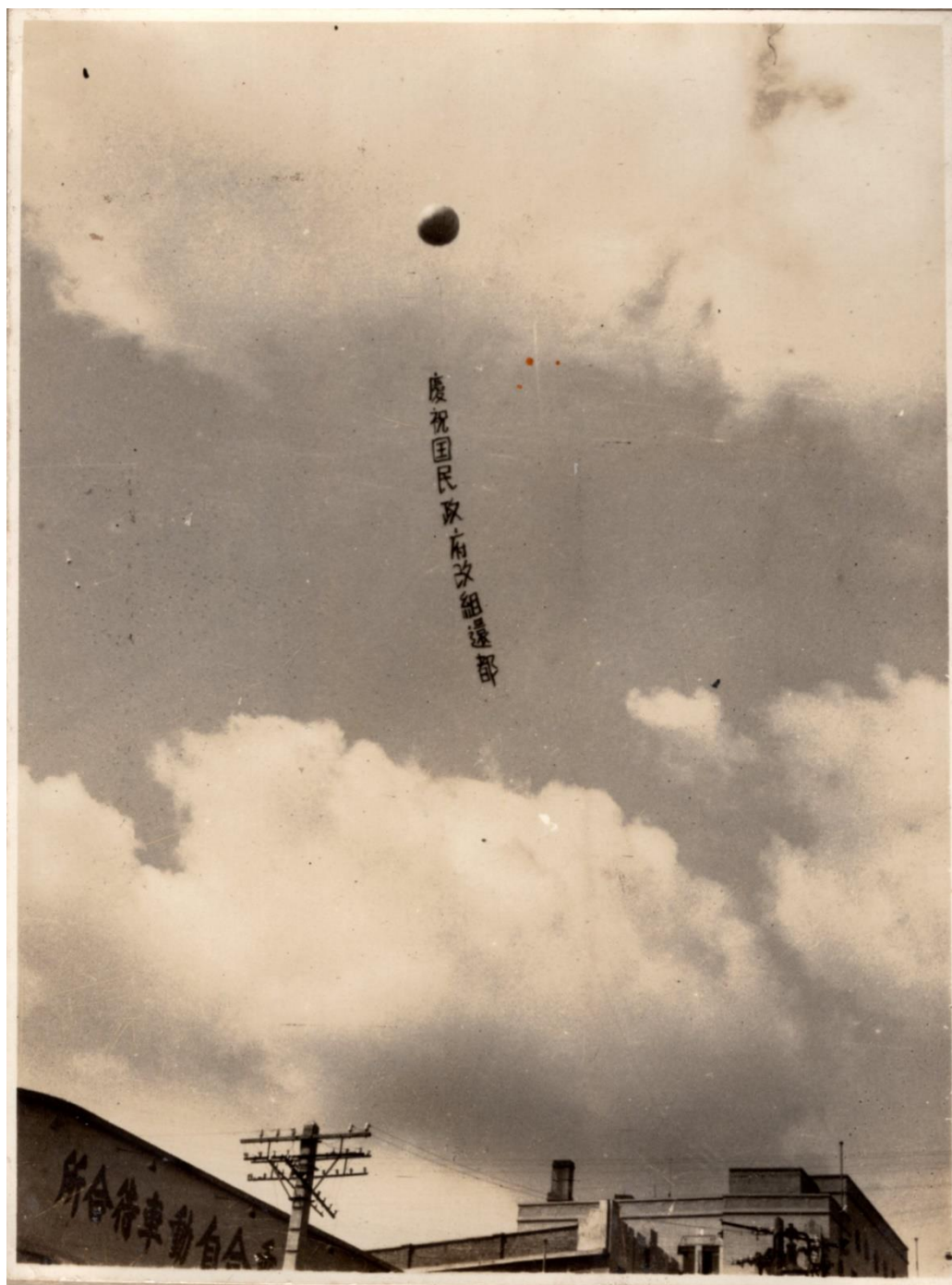


第 54 回戦争体験文庫資料展示

日 中 戦 争



期間：2020 年 2 月 29 日～6 月 28 日

解 説

簡単なものでも、だいたいの歴史年表には、昭和12年(1937)7月7日盧溝橋事件が起こり、日中戦争が始まった旨の記載があります。しかし、「日中戦争が終わった」記載や日付のない年表も数多く見られます。では、日中戦争はいつ終わったのでしょうか？。

1.昭和16年12月、日本が宣戦布告しアメリカやイギリスとの戦争になったため、中国との戦争どころではなくなって終わった。

2.昭和20年8月、ポツダム宣言を受諾した日本は、アメリカやイギリスとともに、中国に対しても降伏することによって終わった。

もちろん正解は2.です。対英米開戦後、政府は今後「支那事变」を含めて「大東亜戦争」とすると命名しており(いつからという問題は残りますが)、今日の一般的な理解や用語法によれば、「日中戦争」を含めての「太平洋戦争」または「アジア・太平洋戦争」と言い換えることもできます。

ともすれば、対英米戦争開始後も中国との戦争が続いていたことを忘れがちになるのは、戦線の膠着状態が長く続いていたせいです。太平洋の島々や東南アジアを舞台に、激しい陣取り合戦が繰り返され、「占領」「海戦」「玉砕」といった報道が繰り返されていたのとは対照的です。

その一方で、日本軍、特に陸軍将兵の多くは、中国で戦っていました。『引揚げと援護三十年の歩み』(厚生省、1977)から、終戦時に日本陸軍軍人・軍属(軍工廠への動員者も含む)どこに何人いたかを挙げてみましょう。日本本土には238万人で、当時日本の領土であった朝鮮、千島樺太、台湾に計55万人、日本の勢力圏下にあった満州に66万人です。これらの地域は、米軍の空襲やソ連参戦等により、戦火に巻き込まれつつあったとはいえ、基本的には対英米戦争開始後も「銃後」であった地域で、本土決戦に備えての根こそぎ動員といった、水増しされた「軍人」の数を含みます。一方戦地では、満洲を除く中国に105万人、南方、つまり東南アジアや太平洋方面に81万人です。105万という数字は全日本陸軍軍人・軍属数547万人の約2割にあたり、昭和16年以降主戦場になっていた南方での数をもしのぐものでした。

戦争体験文庫に寄せられた、図書や手記の中にも、日中戦争に関するものは多数あります。しかし、従来の展示ではあまり活用できなかった嫌いがあります。原因としては、昭和13年の南京事件といったデリケートな問題を含むこと、戦線の膠着状態が続いていたこと等が挙げられますが、日本人の戦場体験を考えるうえで、昭和12～20年の中国での体験は看過することはできません。今回は、その一端を示すことしかできませんが、今後鋭意その紹介に努めていきたいと思います。

波多野澄雄他著『決定版日中戦争』(新潮新書、2018)等によって、ごく簡単に日中戦争の経過を見てみましょう。

満州事変のきっかけとなった柳条湖事件は陸軍の一部による謀略ですが、盧溝橋事件については偶発的なものという説が一般的です。すなわち、散発的に行われた日中両国の銃撃戦は、現地軍同士の間でいったんは収まりかけたものの、日本軍内では「拡大派」が主導権を握り、中国北部での戦闘が激化、上海でも海軍陸戦隊が上陸して交戦状態に入ります。

拡大派の意図としては、中国に軍事的な一撃を加えることで、満州事変以来顕著になっている、蒋介石国民政府の抗日熱を冷まし、屈服させることを狙ったとされていますが、その目的は達しえず、なしくずし的に日中全面戦争に発展していきます。日本軍は、時に激戦を交えながら、開戦後1年強の間に北京・上海・南京・徐州・武漢といった中国の主要都市を占領しますが、これら占領地と鉄道網の維持には、多大な兵力を必要とし、そのまま戦線は膠着しました。日本軍は、何度か大規模な作戦を展開して、膠着を打開しようとしませんが、大きくはそのままの状態、昭和20年の終戦にまで至っています。昭和16年、対英米戦検討過程での、昭和天皇による「支那は奥地広し」というも、太平洋はさらに広し」という杉山元参謀総長への叱責(『昭和天皇実録』8、杉山は盧溝橋事件時陸軍大臣)は、よく知られています。

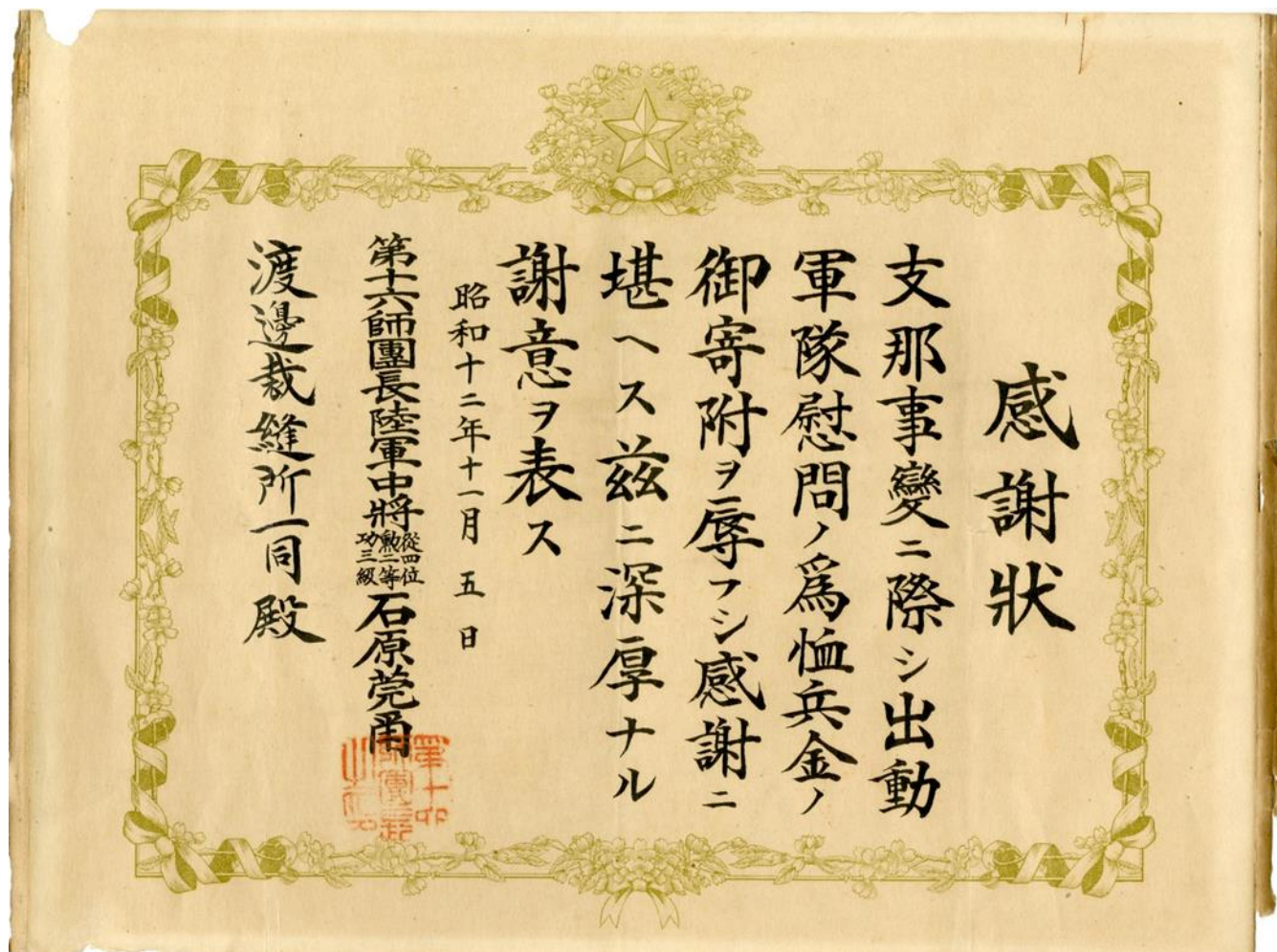
ただ、終戦時制海権、制空権を奪われて、戦線が完全に崩壊していた南方等と比較すると、良好な戦力を保持していました。中国で始まった国共内戦に巻き込まれた個人や部隊を除くと、復員も比較的順調に進展しています。

表紙) 昭和15年3月、日本軍制圧下での「国民政府」樹立を祝うアドバルーン。国民政府首都、南京の陥落後、蒋介石率いる政府は重慶に遷都しましたが、軍事的解決に行き詰った日本軍は、中国側の内部分裂を促すため、以前から蒋と対立しがちであった国民党左派の汪精衛(兆銘)を擁立します。つまり、汪により国民政府が「改組」して、南京に「還都」したとこのアドバルーンは訴えます。台紙には「和平！救国！ 英雄汪精衛ハ立ッタ 昭和十五年三月三十日ハ 見ヨアドバルンハ白雲高ク 英雄苦難ノ前途ヲ祝福ス」と、写真を保持していた、日本海軍軍人のものらしき手書きのキャプションがあります。

しかし、要人の多くは蒋の国民政府に残留し、日本軍も汪政権に実質的な権力を渡さなかったため、中国民衆の支持を広げることとはできず、日本が蒋政権と交渉する際の障害にすなりました。汪政権関係者は戦後、蒋政権より「漢奸」(民族の裏切り者)として、処刑を含む厳しい処罰を受けました(益井康一『漢奸裁判史』みすず書房、1977)が、汪自身は終戦前に日本で客死しています。



内閣情報部発行の『写真週報』21(1938)が国民に提示した支那事変(日中戦争)認識。蒋介石、毛沢東、孫文の写真や肖像が見える。



日中戦争を機に国内は、戦時体制に突入する。左のように盧溝橋事件勃発日には、粗食で戦地を忍ぶべしといったキャンペーンが行われた(『写真週報』21、1938より)。

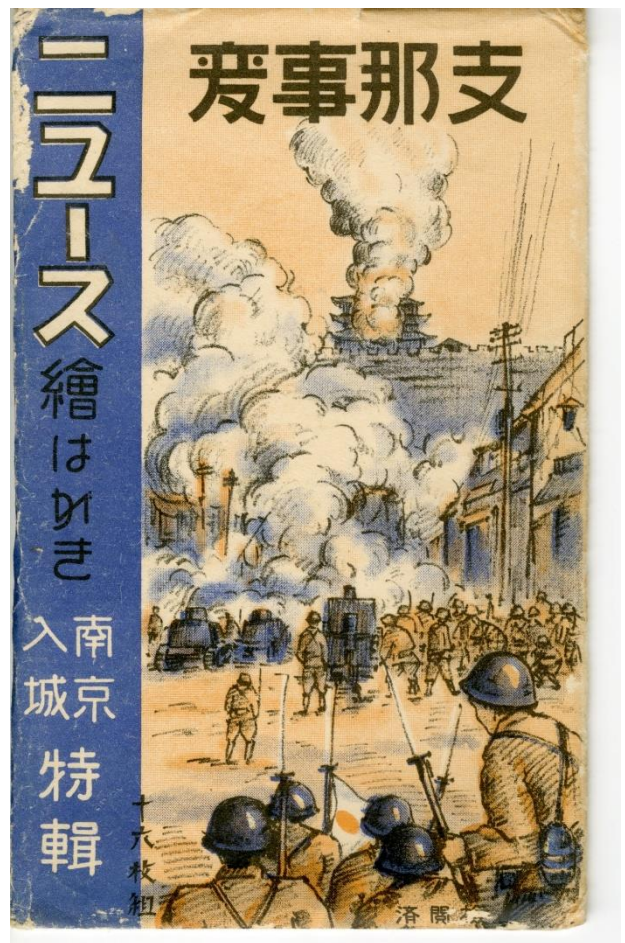
上の感謝状に名を記す石原莞爾は、満州事変から満州国建国の主導者で、盧溝橋事件時には参謀本部作戦部長の要職にあった。対ソ戦準備に専念すべきといった立場から、事変の不拡大を主張したが、拡大を主張する部下の武藤章作戦課長らに敗れ、その後第16師団長に、実質「左遷」されていた。



高鳴る建



朝日新聞社版(以下すべて同じ。毎日版同名誌も存在する)『支那事変画報』6(1937)、29(1939)より。上は昭和 12 年上海での市街戦。下は昭和 13 年徐州作戦を行った日本軍に対し、中国軍が対抗策として決壊させた黄河堤防の復旧工事で監督する日本兵。



左下は南京陥落後撮影された孫文銅像(『支那事变画報』11)。キャプションには「その孫文こそは攻囲軍の最高指揮官松井大将[右下絵ハガキ、引用者注]とは肝胆相照らした親友とともに東亜を語り合った仲だった。孫文の霊としても、南京で日本軍を迎へやうとは思はなかったであろうし、松井大将としても感慨無量であろう」とある。松井のその方面の著作を取り上げたものとして野村幸一郎編『松井石根アジア主義論集』(新典社、2017)がある。この孫文像も、協力者であった長崎商人梅屋庄吉によるもの(小坂文乃『梅屋庄吉の生涯』長崎文献社、2012)。松井はいわゆる「南京大虐殺」の責任を問われ、東京裁判の結果刑死している。

江西北第一線に活躍の我が道班



炎熱百四十度、長江作戦に、血の出るやうな皇軍の猛進態に從軍して宿松に到着、息つく暇もなく就後のニュースを執筆する本社印刷員の獅子奮迅ぶり

御要を据ゑるや、早速朝店。飛行機より早い無電でジャヤ／＼ニュースを送らうと通信準備に忙しい本社の矢谷無線技師

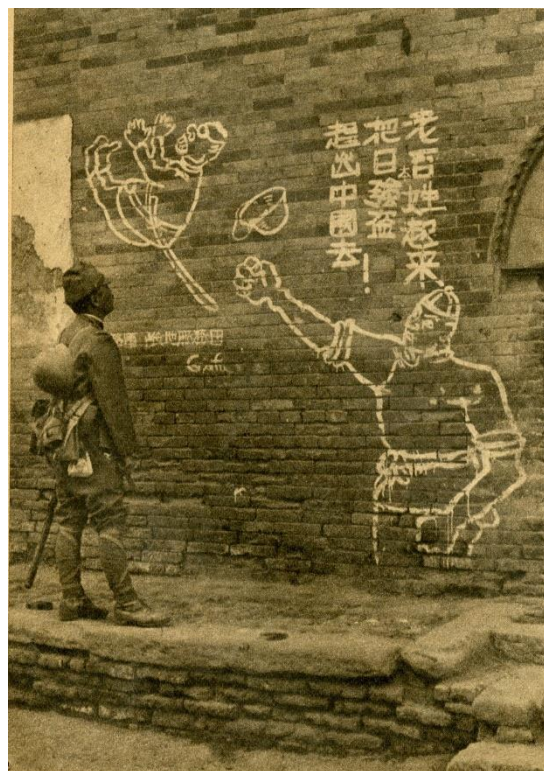


◇ア 頃外
 ◇ア 沙島
 式に
 ◇瀬 事代
 對！
 退方
 ◇西 フ外
 蜂事
 が、
 自國
 物別
 ◇第
 は中



和縣城外の人家の壁に支那人が殘した落書

→ 和縣城門の上に唯一人踏み止まつて捕虜となつた敵の女兵士成本華（二〇）中國女童軍と刻んだ止金のついた襟革をしめ、肝腎のことは一つも自白しない抗日のガリくである



上から『支那事变画報』21、16、19(1938)より。
同誌は『週刊朝日』『アサヒグラフ』臨時増刊号として継続して発行されていた。新聞記者が軍の協力、検閲のもとに取材、編集、発行している。そうした性格を反映して、軍の宣伝色が強まりがちで、軍が地元中国人、特に子供に慕われているといった写真をことさら取り上げている。が、中には抗日派に触れたものも見られる。

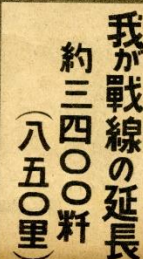


中国国民党の本部や地方組織が出版した宣伝小冊子類。民国暦 20 年(1931、昭和 6)の満州事変前後に発行されたもの。

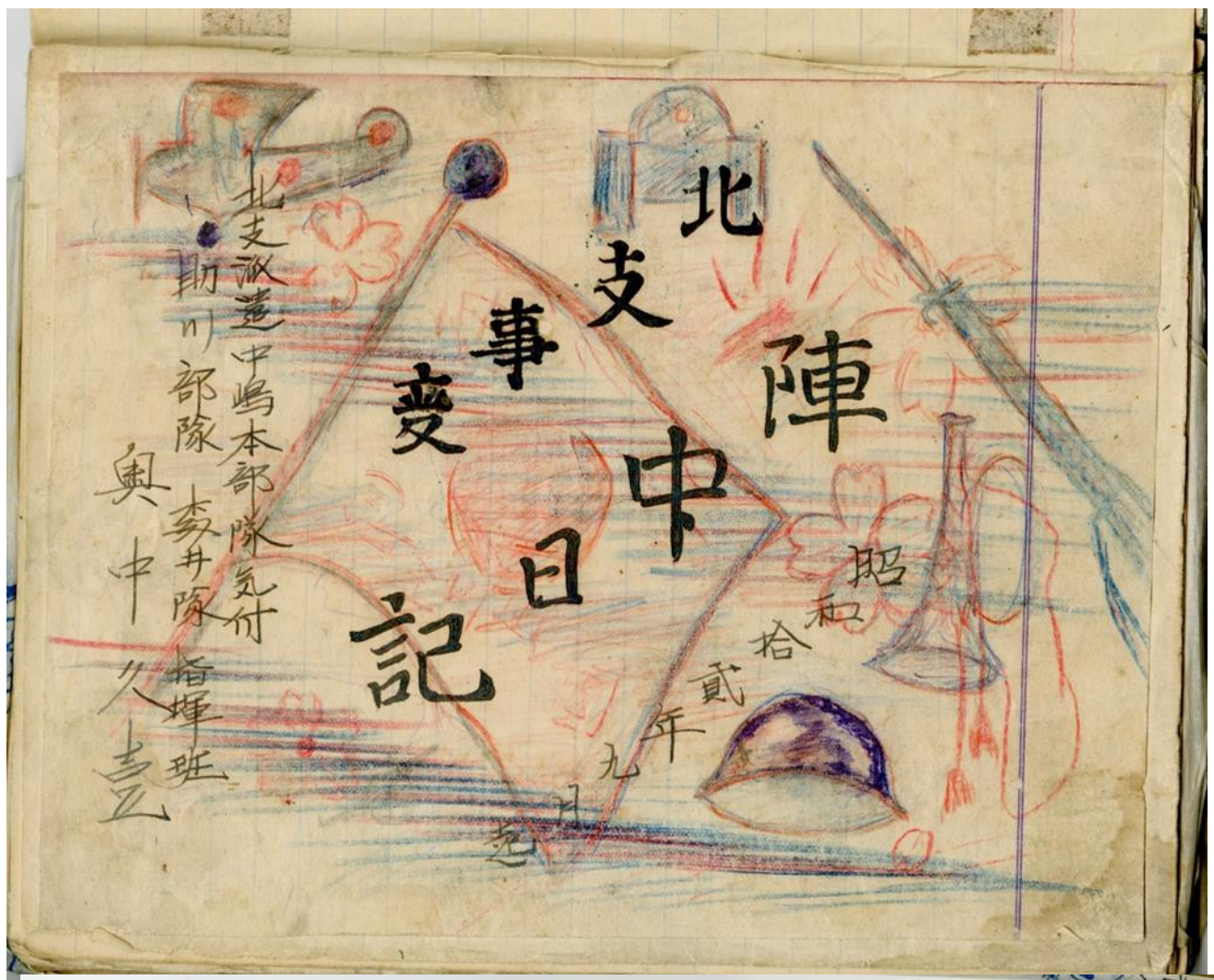
洲

昭和四年六月に於ける我が古田縣の穀類輸出額は、
順次、河北、山東、山西、江蘇、安徽、全省及び臺灣、
湖北、浙江、江西、湖北、廣東の各都、河南島の南支那
に、一、五〇萬圓、五二、一、九三八萬圓で我が全土
七、一、五五五萬圓の二倍半に達する。

これを内陸地以ての支那本土（二、一五七、三四六
萬圓）と比較すると、正に其半に達し、更にこれを
支那本土（一、〇〇五九、八七五萬圓）と比較する
ときは、約其の十六％に相當する。



7



陣中日誌草稿

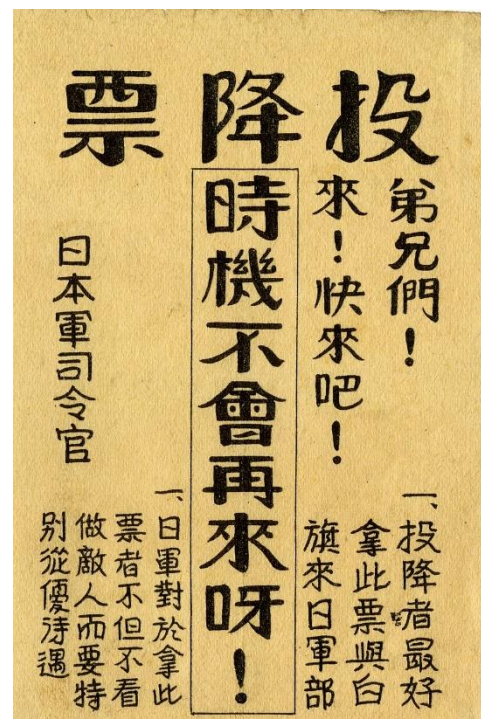
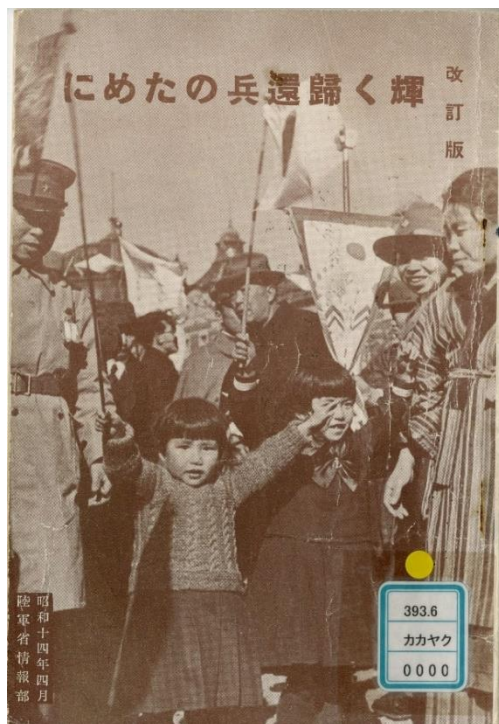
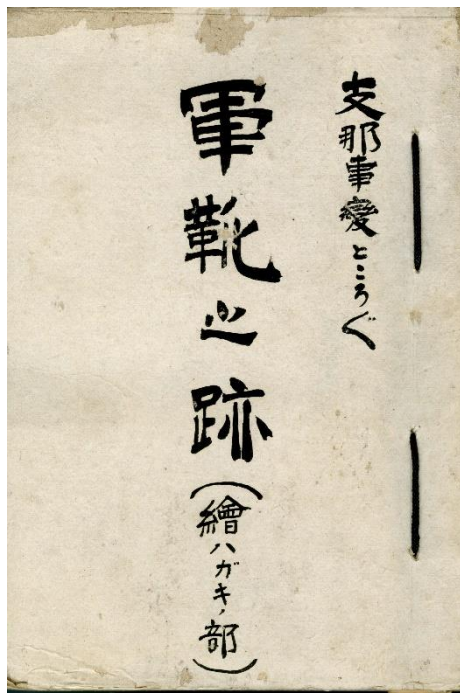
自昭和十二年八月四日の二ヶ年に亘り
至昭和十四年八月十日の二ヶ年に亘り
戦場に於ける各種行動を日誌に記すこと
を陣中日誌の中へ書き連ねたのがこの草稿
六冊であります。

部隊凱旋の折、所持品の検査が厳しく
各人の私物品の総てが憲兵の厳密な検査
の対象となりました。

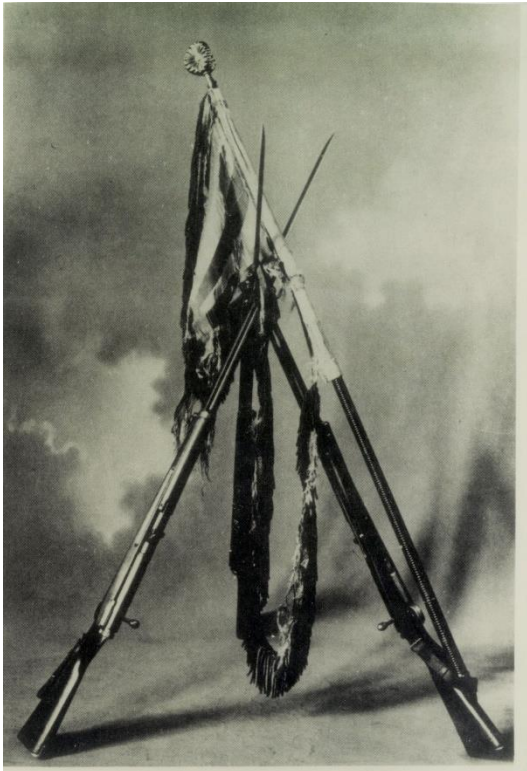
この草稿には陣中日誌の資料である戦時
詳報の一部や、戦時経過要図の殆どが
含まれ、軍規上は絶対許さるべきではありません。
また、その中で何日もの旅に六冊の草稿全部
を公用行李に収め、陣中日誌資料奥中
軍曹坦亭」と大書して受贈し、軍事
この難関を突破致しました。

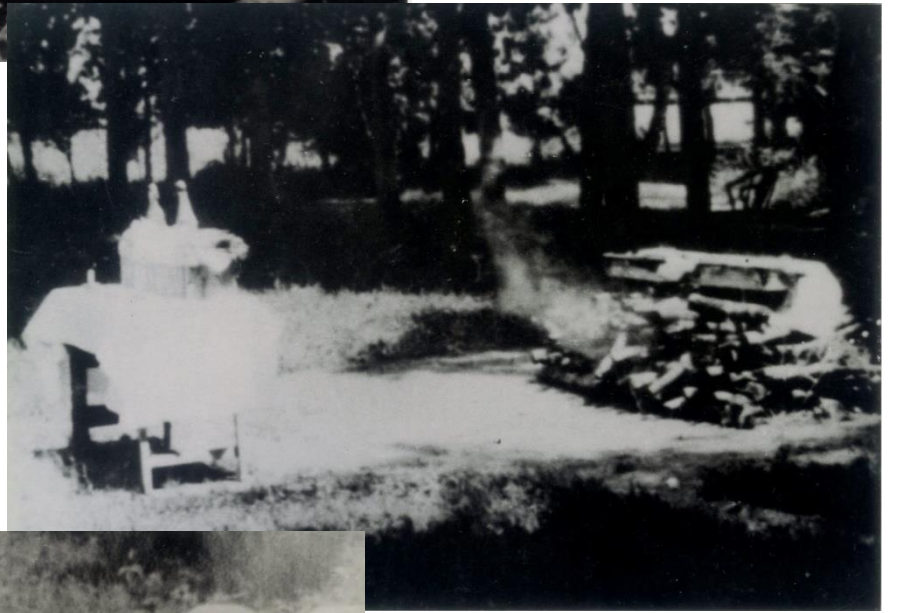
又南京城の掃蕩作戦中、敵將校と
「対一の血闘をい彼を刺して取得した
支那軍の短剣」一振りは、事変の記念品と
して持帰ったが、完全な武器であり、
それは許されず、玄海灘に涙と共に放棄
致しました。

日中戦争に下士官として従軍した、奥中久壺による陣中日誌と自身による解説。奥中には本日記をもととした著書『いくさの場：支那事変参戦日誌』1994もある。



上は中国の景観絵はがきの上にその場所で行われた戦闘を回顧したもの。左下は復員兵向けの小冊子、右下は中国兵に投降を呼びかけるビラ。





歩兵第六十八連隊による軍旗(連隊旗)の奉焼。写真裏には前頁左上から 1.歩兵第六十八連隊軍旗遺影 S20.8/2.最後ノ軍旗ト共ニ皇居遥拝[右]連隊長[左]軍旗/3.最後ノ「軍旗ニ敬礼」昭和二十年八月連隊将校以下/4.旗手カラ連隊長ニ、本頁 5.軍旗ヲ焼却先ニ/6.連隊長軍旗ニ点火/7.連隊旗焼却と写真裏にキャプションがある。連隊旗は、大元帥たる天皇から下賜された神聖なものとされ、「玉碎」した部隊もしばしばその直前にこうした儀式を行っている。写真に登場する連隊長川崎貞弐の回顧によれば、昭和 20 年 8 月 26 日、江西省池州郊外で行ったという(『第三師団郷土部隊史』1967)。

戦争体験文庫資料展示一覧

回数	期間	展示テーマ
第1回	平成17年11月1日～1月31日	戦争と少年たち（図録なし）
第2回	平成18年2月1日～3月30日	戦時下の国民生活 徴兵される青年たち
第3回	平成18年4月1日～5月30日	戦時下の国民生活 銃後の生活
第4回	平成18年6月1日～7月30日	戦時下の国民生活 占領下の生活
第5回	平成18年8月1日～9月30日	戦争と教育1 ある教育実習生の日誌を中心に
第6回	平成18年10月1日～11月29日	戦争と教育2 学童疎開
第7回	平成18年12月1日～19年1月30日	軍隊と地域1 戦地・占領地での軍隊 ビラと軍票
第8回	平成19年2月1日～3月29日	軍隊と地域2 村と軍隊 村役場/在郷軍人会
第9回	平成19年3月31日～6月28日	軍隊と地域3 村と軍隊2 勤労・増産・金属回収
第10回	平成19年6月30日～9月27日	軍隊と地域4 奈良の戦争遺跡 奈良聯隊 奈良海軍航空隊
第11回	平成19年9月29日～12月27日	戦争と手紙1 出征
第12回	平成20年1月5日～3月27日	戦争と手紙2 戦地からの手紙
第13回	平成20年3月28日～6月26日	戦争と手紙3 戦地への手紙
第14回	平成20年6月28日～9月28日	戦争と手紙4 帰還
第15回	平成20年10月1日～12月27日	子どもたちが見た満州1 満州修学旅行
第16回	平成21年1月6日～3月29日	子どもたちが見た満州2 満州建設勤労奉仕隊・満蒙開拓青少年義勇軍
第17回	平成21年4月1日～6月28日	戦争と食べもの1 米の配給と供出
第18回	平成21年7月1日～9月29日	戦争と食べもの2 野菜
第19回	平成21年10月1日～12月27日	戦争と食べもの3 調味料
第20回	平成22年1月5日～3月30日	戦争と食べもの4 代用食
第21回	平成22年4月1日～6月29日	就職先としての軍隊 海軍志願兵
第22回	平成22年7月1日～9月29日	進学先としての軍隊 陸軍士官学校、海軍兵学校
第23回	平成22年10月8日～12月26日	工場 国営兵器工場
第24回	平成23年1月5日～4月17日	貯蓄報国
第25回	平成23年4月19日～6月29日	大和の隣組 戦争を支えた地域組織
第26回	平成23年7月1日～9月29日	大和錦 在郷軍人会奈良支部の活動
第27回	平成23年10月1日～12月27日	産業組合から農協へ 戦時・戦後の協同組合の再編
第28回	平成24年1月4日～3月31日	赤十字 その成り立ちと展開
第29回	平成24年4月1日～6月28日	8.15で終わらなかった戦争 日赤奈良班看護婦の手記から①
第30回	平成24年6月30日～9月27日	灼熱の陽の光の下で 日赤奈良班看護婦の手記から②
第31回	平成24年9月29日～12月27日	病院船の上で 日赤奈良班看護婦の手記から③
第32回	平成25年1月5日～3月28日	原爆の惨禍を目のあたりにして 日赤奈良班看護婦の手記から④
第33回	平成25年3月30日～6月27日	かるたで読む「戦陣訓」
第34回	平成25年6月29日～9月29日	小学生国史受験かるたの世界
第35回	平成25年10月3日～12月27日	大淀町学校支援地域本部 戦争カルタの世界
第36回	平成26年1月5日～3月27日	愛国百人一首を読む
第37回	平成26年3月29日～6月26日	日本統治下サイパンの日常から戦争へ 須藤氏手記1
第38回	平成26年6月28日～9月28日	爆撃の中の逃避行 須藤氏手記2
第39回	平成26年10月1日～12月27日	壕からかいみたま日本兵と米兵たち 須藤氏手記3
第40回	平成27年1月6日～3月29日	極限の日々から 須藤氏手記4
第41回	平成27年4月1日～9月27日	あの日から70年 追想の8.15
第42回	平成27年10月1日～28年3月30日	進駐軍と奈良 Occupied Nara
第43回	平成27年4月1日～7月19日	昭和15(1940)年、紀元2600年祭 — あなたは知っていますか? —
第44回	平成27年7月20日～11月30日	「奈良連隊」がいた光景
第45回	平成28年12月1日～29年3月30日	陸軍少年兵
第46回	平成29年4月1日～7月27日	戦勝記念図書館の記憶/記録
第47回	平成29年7月29日～12月27日	鉄道連隊
第48回	平成30年1月5日～3月29日	民博所蔵戦時債権の世界
第49回	平成30年3月31日～8月30日	陸軍特別大演習 於奈良・大阪
第50回	平成30年9月1日～12月27日	日清・日露戦争と奈良(「明治150年大和から奈良へ」の一部として)
第51回	平成31年1月5日～4月30日	昭和8年12月23日「祝皇太子殿下御生誕」の時代
第52回	令和元年5月1日～9月	墨塗り教科書
第53回	令和元年9月1日～2年2月27日	聯隊区司令部
第54回	令和2年2月29日～6月28日	日中戦争